歴史を歩く67　棒踊り

「オセロが山で～前は大川～」
「焼野の雉は～岡の瀬に住む～」
「山太郎ガネは～川の瀬に住む～」

といった七七調の歌にあわせ、棒をカチッカチッと打ち合わせながら、「サーサーサッ」「インヤサ」「エイエイヤーサ」などの囃子とともに踊られる棒踊り。薩摩半島・大隅半島を中心に南九州一帯（旧薩摩藩領）に広く分布し、集落の祭礼などで踊られてきた。棒を使った神事や芸能は日本に広く分布していて、棒術さながらのものをはじめ、空手術の影響が見られるものなども伝承されているが、南九州の棒踊りは、風流色が濃厚で独特な民俗芸能であるという。

南九州の棒踊りは、春から初夏にかけて行われる旧暦2月の春祭り（打植祭り）、旧暦3月の馬頭観音・はやまどんの祭り、旧暦5月の御田植祭りなどの祭礼の時に踊られてきた。その起源については『農耕儀礼』『防御・攻撃術の踊り化』『朝鮮出兵の凱旋祝賀』など諸説あるが、棒踊りを『お田踊り』と呼ぶ地域があることや前述の春から初夏にかけての祭事がいずれも稲作に関わる祭りであることから、棒踊りが稲作と関係の深い芸能であることがわかる。棒踊りの歌も、御田植祭りの田歌から派生している。また、棒踊りの動きや型は、棒術の影響を強く受けながら、それを風流化させたものである。江戸時代初期頃に成立した棒踊りは、その成立にも深く関わる山伏たちによって、たちまち流行し薩摩藩全域に流布していった。

▲荒佐野棒踊り（3年に1回、春祭りにおいて荒佐野親和会が踊っている）

棒踊りと一言でいっても、その種類は多い。基本型は『三尺棒と三尺棒』『六尺棒と六尺棒』『三尺棒と六尺棒』で、そこから『鎌と六尺棒』『鎌とナギナタ』『三尺棒と鎌と六尺棒』『三尺棒と鎌と三尺棒』『六尺棒と鎌と六尺棒』や、錫杖踊り・虚無僧踊りなど十数通りの変型に発展していった。踊り手の人数も2列縦隊で踊る4人1組の場合と、3列縦隊で踊る6人1組の場合がある。服装や振りの変化なども加えると何十通りもの棒踊りが存在した。

かつて大崎町内でもあらゆる集落で棒踊りが踊られていたが、ここ数十年の間に随分と途絶えてしまい、現在でも踊られている集落は僅かとなった。しかしそのような中、近年、中沖校区・野方校区・大丸校区において、地域の学校と住民が一体となり、棒踊りを伝承する取り組みが行われ、主に運動会で踊られている。

このような取り組みを通じて、『棒踊り』という地域に根付いていた伝統芸能を子どもたちが体感できるようになった。また、子どもたちの踊りに多くの人が懐古の念を抱いていることだろう。

今年ももうすぐ棒踊りの季節がやってくる。小節のきいた独特な歌、カチッカチッと打ち合う棒の音、威勢の良い囃子、そして勇ましいその動きから、先人たちが棒踊りに込めた五穀豊穣や無病息災を祈る想いが伝わってくるのではないだろうか。

【参考文献】
・下野敏見　2009『南日本の民俗文化誌2　鹿児島の棒踊り』南方新社
・鹿児島県教育委員会　1992『鹿児島県の民俗芸能』あすなろ印刷

▲中沖校区棒踊り